

オレノ町の人々

ここは生活を楽しむ人が多く住む都内某所のオレンジ町。各方面で活躍する4人が、毎日の暮らしのなかから生まれるエッセイをつづる広場です。



よなかの散歩

激辛の悲劇



「これがその、激辛ラーメン。
(蒙古タンメン中本)の
北極ラーメンです」

1967年神奈川県生まれ。作家。
2005年「対岸の彼女」(文藝春秋)で厚木賞受賞。著書に、「水曜日の神さま」(幻戯書房)、「くまちゃん」(新潮社)など。今まで行った国は30カ国以上。年に2回は海外に行くほどの旅行好き。

味覚障害か?と自分で思うくらい、辛いものが好きである。人より辛いものが食べられるという自覚がある。激辛好きは総じて自身の激辛趣味を恥じているから、注文のときも声がちいさい。辛さの選べるカレー屋で「あのー(十段階中)十倍で……」と小声でささやいたりする。先だって、この私の激辛好きが原因で、たいへんな悲劇が起きた。

このページの担当をしてくださったというSさんと、所用があつて昼に落ち合い、そのままランチを食べに行くことになった。場所は私の仕事場の近く。すごくおいしいカレー屋があるんです。と私は彼女を案内した。このカレー屋、辛さが選べる。私はいつもは激辛なのだが、この日はやまゝ気を起こし、激辛二倍を注文した(ちなみに激辛四倍まである)。Sさんはごくふつうの辛さ。

注文した品が運ばれ、私たちはアレコレとおしゃべりしながら食べはじめた。「うわ、すごく辛いですね」とSさん。この店のカレーは、「ふつう」を選んでもけっこうぴりつとずる。だから「ふつう」の下に、「甘口」が二段階あるのだ。(Sさん、辛いもの苦手なのかな……)と思いつつ、「そうなの。けっこう辛いんです。辛口を勧めなくてよかった」と私は笑い、自分のカレーがあんまり辛くないことにひそかに首をひねった。

じつは三日ほど前、私は常人がにおいすら嗅げないだろうほどの激辛ラーメンを食べたばかりだった。あのせいで辛いもの免疫がついて、激辛二倍もなんともなくなったのかなあ、と思うが、しかしそれにしても、辛くない。お店の人が辛さの段階を間違えたのかも(恥ずかしさのあまり小声で注文するので、ふつうと間違えられることはよくある)と思うが、しかし店員の女の子に「辛さ間違っていない?」などと指摘して、新しく作りなおす、となったら面倒だ。なんて思いつつ、横目でSさんを見ると、Sさんぜんぜんスプーンが進んでいない。(もしかして、口に合わない?)と不安になりながら、完食。Sさんはルーだけ少し残している。

「なんか今日は辛くなかった……」

と言いかけて、私ははたと気づいた。Sさんも同じく、はっとした顔で、「これ、一口食べてみてください」と、ルーが残ったお皿を押し出す。食べてみて、「ああ!」私は叫んだ。それはまさしくことなく激辛二倍の味だった。Sさん、こんなに辛いのが、よく食べた! 自身の狂った味覚の自覚がある私は、ひたすら申し訳なく、気の毒なのだが、しかし、笑いがこみあけてくる。Sさんは私が激辛好きだと知っているの、ふつうがその尋常ならぬ辛さ、その二倍を私が食べていると思ひこみ、なんとすさまじいことかと内心思っていたそうだった。なんてこと。激辛好きが招いた悲劇。とはいえ、悲劇なのは地獄のように辛いカレーをほぼ完食したSさんだけだ。

ああ、この激辛二倍カレーでフレッシュな味を潰したSさんが、激辛界に仲間入りしてしまったらなんとお詫びしよう。ついでうか、思い切り笑ってごめんなさいSさん。

The one of the most interesting thing in the world is the story of the person who is very spicy.

岡田光代

